

# 町村氏は八雲の農民に 何を教えたか！

八雲町 太田 正 治

(編者注)

今から45年前に、北海道、否、日本酪農の先哲と言われた町村敬貴氏を訪ねた酪農青年 太田正治氏は、その時、何を教えられ、何を学んだか…

今、その訪問記を「酪農」誌(第88, 89, 90, 93号, 昭15)でみると、酪農の本質(土づくり, 草づくり, 牛づくり)は不変であることを再確認できる。

時あたかも国際競争力のある、足腰の強い酪農経営確立の要請の強い今日、“原点に立ち返って経営の本質を見つめる”ためにも、太田氏と「酪農」の発行先である雪印乳業・酪農部のお許しをいただいて、本誌に連載することとした。

上記を記載する前に、ここで町村敬貴氏及び太田正治氏と八雲をご紹介します。

### ●町村敬貴氏の紹介

○町村敬貴記念事業の会長 佐藤貢氏の町村敬貴翁伝記“発刊のことは”(昭45)の一部を引用させていただくと、次のとおりである。

「町村敬貴翁は生粋の道産子としてエドウィン・ダン氏の開設された真駒内種畜場で金弥氏の長男として生を享けられ、北大選科を卒業されると酪

農を生涯の事業として選ばれ、酪農の先進地ウインコンシン州のラスト牧場において体験を積まれ、あるいは大学に学ばれるなど、理論と實際を深く身につけて帰朝後、気候と地味に恵まれない札幌郊外の花<sup>ばんなくろ</sup>畔に牧場を開設し、あらゆる苦難と闘って良牛の生産と合理的酪農経営に専念され、その後江別に牧場を移されたのであるが、その間幾度となく米国に渡り、優秀な種<sup>じん</sup>雄牛と種雌牛を輸入されて、わが国の乳牛改良に甚大なる貢献をされた。また早くから、良牛の生産には土地の生産力を高め、良質の牧草を量産することの必要性を力説され、自らこれを実践して範を示され、客土排水から大型農機による耕作、飼料作物の選定、品種の改良、酸性土壌の矯正に炭酸石灰の重要性を提唱され、また、第二次世界大戦前、国際情勢風雲急を告げると、農機具や飼料、種子の国産独立の急務<sup>きゅうきよ</sup>を唱え、急遽渡米されてクローバハラ-その他の機械を輸入してその自給を図られるなど、酪農業の安定と振興に真剣な努力を払われた。また、道内の乳業会社の合同を提唱され、その実現のために各社の首脳部を説得し、遂に興農公社を設立して業者間の過当競争を排除し、酪農民の利次 ●

### ● 目



研究開発を担う  
中央研究農場

- 異常気象との闘い……………中野 富雄…表②
- 町村氏は八雲の農民に何を教えたか! ……太田 正治… 1
- 飼料作物に対する堆厩肥の連用効果……………野村 忠弘… 6
- 高泌乳のための粗飼料とその効果的な利用……………和泉 康史…11
- 自給飼料の質の向上……………兼子 達夫…15
- 府県における自給飼料の生産と利用……………山下 太郎…19
- サイトウ「スノークロップ112」の  
品種特性と栽培体系……………近江 公…24
- 雪印種苗(株)中央研究農場……………表③
- 雪印種苗(株)千葉研究農場……………表④

益を図られるなど、自己の経営を省みず、昼夜を分たず活躍されたことは北海道の酪農史上忘れ得ない事柄である。」

○更に、日本酪農の大先達 黒沢西蔵氏も同伝記の発刊によせて、町村敬貴氏を次のように紹介しております。

「敬貴君はかのクラーク博士の卓越せる教育理念の脈打つ札幌農学校に学び、卒業後直ちにアメリカに渡り、実に10ヵ年にわたって、先進文明、先進技術を積極果敢に摂取した。その執心はまさに異国人を驚倒させ、旺盛な知識欲、真髓を見究める天才はだしの眼力は、その間遺憾なく発揮された。

帰国後も、慢心を知らず、日進月歩の世界をにらみ、日本と北海道に益するところを導入し、我々を教導し続けた。私自身、生涯、敬貴君を通して世界の酪農と先進文明を学んできたのであって、その恩は終生忘れ得ぬところである。

実に、敬貴君は近代日本の輩出した欧米先進技術の摂取導入者の群像の中にあってもひとときわ異彩を放つ特異な存在なのである。君のお陰で、日本の酪農ばかりか農業がいかほど科学化され、合理化され、近代化されたことであるか。その功績はとうてい筆舌をもって表わすことは不可能である。

が、その中から、私なりに特に4つの功績を挙げるとすれば、第1は日本の乳牛の資質を世界一の水準にまで押し上げた品種改良のことであり、第2は特殊土壌の科学的土地改良法の導入者・実践者たることであり、第3は農業者をかこくな重労働から解放し得る農業機械の導入者・普及者としての功であり、第4に、乳業の統合合理化の推進者としての功である。

私はかかる巨大な功績を彼をしてなさしめたその根源は彼の言う万物に対する愛情にあったと信ずるのである。人はよく敬貴君の牛に注ぐ異常なまでの愛情を口にするが、私はそれは牛に対するばかりでなく、土にも草にも、機械に対しても同じであったと思う。ひいては民族、国家、世界に対する愛情も同じであったのだ。

敬貴君の名が不朽のものになることを私は信じて疑わぬものであるが、それは恐らく、彼の終生抱いた万物に対する愛が本物であったという一点

からのみ説明し得るのではあるまいか。」

### ●太田正治氏と八雲の紹介

○太田正治氏は、昭和59年8月、第1回ダンと町村酪農文化賞を受賞されました。太田氏の略歴と功績を受賞理由書より抜粋すると、次のとおりである。

1 太田氏は、八雲町における酪農先覚者として大正7年以来酪農一筋に歩まれ、昭和22年からは冬季の農閑期を選んでウインタースクールを企画、酪農青年の育成につとめられた。

2 昭和23年、北海道酪農青年研究連盟が設立されると、初代委員長として活躍され、更に日本酪農青年研究連盟に発展し、昭和42年まで20年にわたり委員長として情熱を傾けて全国酪農青年の育成につとめられた。

3 太田氏は、酪農経営を国際水準に引き上げるべきであるとの信念に基づいて、自らこれを体験するため、昭和27年、50歳でデンマーク酪農を研修され、1ヵ年にわたって畜舎で、圃場でデンマーク酪農民と共に汗を流し、語り合い、現場の研修からデンマーク酪農の真髓を見出して帰国されてからは、この貴重な体験をもとに昭和30年には「私は見たデンマークを」発刊され、「酪農のバイブル」として広く酪農家に愛されている。

4 酪農の真髓は土づくりであるとの信念を持ち続け、昭和14年に「火山灰層の征服」と題するパンフレットを発刊し、火山灰層への挑戦という大事業への夢をかかげ、数年間かかり八雲町の約1,000 haの火山灰層の征服事業が挙町の体制で実現された。

以上のごとく太田氏は先見力によって国際的視野を広め、酪農青年を育成するための創造的な活動を行うとともにロマンに満ちた写真文庫の発刊などを通じて酪農文化の発展に尽された功績は大きく、酪農文化賞受賞の最適任者である。

○八雲町は北海道の南部、噴火湾に面し、土性は火山性土、泥炭土等の不良土壌が多く、夏季は海霧多く、冷涼で、古くよりバレイショ、酪農を中心とした経営が多く、とくに酪農については北海道でも先発の地帯である。町の耕地面積5,400 ha(うち牧草地2,500 ha)、主業農家400戸、乳牛頭数12,000頭、肉用牛120頭の酪畑の農業町である。

☆————☆————☆

町村敬貴氏の印象

町村敬貴氏は百姓であった。僕達は、今更のように農民町村を、江別にある50haの彼の耕地の中で発見した。自分の土地を、その家畜共を、彼ほど百姓らしい純情さで熱愛し、宗教的な敬虔さで、その天職たる農業に忠実にしがっている者がいたい八雲町に幾人いるだろう。

町村氏は50haの農場主であり、100頭の純血牛の畜主であり、堂々たる邸宅の主人公であり、北海道におけるあまりにも有名な農民紳士であった。今、僕たちが会い、話し、美しい牧草地をいっしょに歩き回っている彼は、全く僕たちの仲間である。僕たちと労苦を共にする百姓である。

それはただに、彼の偉大な、節くれだった手—それは労働した者のみに与えられる光栄ある手である—や、オーバーオールにでんぶん靴の百姓姿だけがそう感じさせるものではない。彼こそ北海道の代表的な農民であることを、僕たちは彼のうつぼつたる百姓精神のうちに発見したのである。

#### 町村氏のホーム

##### これも1戸の農民の家である

町村氏の家は、僕の想像している米国の農家そのままのものだった。南面に開け放されたたくさんの窓には、美しいカーテンが涼しくゆれて、見上げる急こうばいの屋根は優に屋根裏の3階の部屋をつくる事が出来ている。その屋根の上に突き出た赤い煉瓦の煙突、玄関前の広々としたローン。この美しい洋館には、外観にも内容にも伝説めいた暗さや、古めかしさがみじんもないし、りっぱなことはりっぱだが、僕たちのような田舎からの訪問者をも威圧するような冷たいものでなく、すぐになじんでしまうことが出来る明るい、暖かいホームだった。これは、この家の主人公夫妻の性格でもあろうか。

これも1戸の農家である。僕らは、この家によって北海道農民の“希望”を具体的に仰ぎ見せられたような喜びに満たされたのである。

高利貸しは高利貸しらしい家を作る。農民もその努力や、教養や、趣味に応じて、農民らしい家を作るのである。我々は、今でこそ牛舎の一隅に寄寓しているような始末だが、やがて“自分の家”を作り得る時が来る。

##### 1m下から土地を建設するのだ

2階の10畳2間を開放した通風の良い部屋、窓から前庭の美しいローンやアカシヤの並木が見下ろせる。そこへ町村氏は、一行を招き入れてすぐ、農場を見せて頂く前の予備知識を兼ねて、氏一流の酪農観を話して下さった。決して雄弁ではないが、その一語一語は、町村氏の体験に基づく信念の流露であり、農業を愛し楽しむ詩情の表現であり、更にまた、自分の仲間—北海道農民を励まし導こうとする熱意のほとばしりであった。町村氏は、一語も乳牛のことや建物や農具のことを話されなかった。氏が一生懸命僕たちに語るころのものは“土地について”である。北海道の土地をどうして良くするかと言うことについてである。

##### いったいどうして土がだめになったか

氏は言う。それは我々の先輩の罪である。我々の先輩が、永い間、土を酷使し、台なしにしてしまったのだ。それで我々の今日の仕事は、最善をつくして、このだめになった土を大昔の健全な土に戻すようにすることである。そのために酪農業を始めたのであるが、単に牛を飼ったから土地が良くなるということとは断じてない。と、氏は力説する。米国における積極的な地力回復の国家的大事業（それは、ある場合は地面の形状を全く変えるほどの大がかりな仕事）を説明し、我々は、このように土地を“建設”するのだ。消極的な自給自足で土地が良くなるものではない。方針としては、“酪農”は間違いなくりっぱであるが、それだけではいけない。“補足”が必要である。恒久的な施設を要する。それがなければ、30年、40年将来には、牛のために土地は更に一層こわされ、ひいては牛の体にも故障を生ずるに至るであろう。だから、我々は、第一の目標は、健全にして、永久に持続し発展し得る土地を建設することである。この大目標をにらんで常に努力し、将来我々の子孫に遺しても大丈夫な土地を作らねばならぬ。

そのためには何をなすべきか。まず石灰を十分に入れること。1m下に土管なり、コンクリート管なりを敷設して排水を完全にすること。そして堆肥を十分にに入れて深く耕し、粘りのある生きた土を作ることである。マメ科植物が十分に育ち、その根の機能を十分に発揮出来るような土に仕上げねばならぬのである。

氏は熱心に語り続けられる。「私は、米国で、北  
欧から移り住んだ農民たちが、荒廃地に居を構え  
て、不撓不屈、刻苦精励して、いかにその土地を  
改良しつつあるかを見せられ、身にしみて強く教  
えこまれて来ました。私のこの農場は、先住者が  
45年間もほとんど無肥料で酷使し瘦せらした土地  
でしたが、私はここへ10年前にやって来て、10年  
間にどうにかこれから見て頂くような作物の出来  
る土地にすることが出来たのです……」

女中が上がって来て、米国のお客さんの来訪を  
告げるまで、町村氏の科学的農業論はますます高  
潮し、終わるところを知らなかった。曰く土地に  
十分な栄養が与えてあれば、そこから生ずる草に  
よって、濃厚飼料を用いることなしに、乳牛を飼  
うことも可能である……云々。

氏はどうしてこのように若々しいか

とうとう昼食まで用意させてしまった。僕たち  
は、遠慮せずに、せっかくの町村夫人の歓待を受  
けた。

昨夜、満員の車中で、ほとんど眠られなかった  
一行は、しばし昼寝の時が欲しくなった。

初秋の真昼の陽ざしは相当に強く、まぶしいロー  
ンの緑の上にアカシヤの並木が黒く、鮮やかに陰  
を落している。僕たち若い連中は、そこを選んで  
寝ころんで眼をつぶったが、とてもだめだった。  
いろいろな想念がグルグル頭の中を駆けめぐ  
るのである。誰からともなく話が始まる。

○「もうこれきりで帰っても十分な収穫があったように  
思われるな……と言って、僕らは何を見たというのだろう。  
まだ何も見やしないじゃないか」

○「町村さんという人に会ったことが、こんなに僕たち  
を興奮させているのかな。いや確かにそうだ。町村さんが  
先刻話したことだって、別段こと新しいことではない。あ  
れは町村氏のいわば持論なんで、早くからいろんな時に発  
表しているからね。僕たちが今こんなに希望に満たされて  
いるのは、町村さんが正真正銘の北海道農民であり、僕た  
ちと全く同じ気持、同じ理想、同じ感情を持っている、い  
わば仲間の一人だったということを知ったからだと思うが、  
どうだ。」

○「おれもそう思う。おれらは町村氏の五分の一ないし  
十分の一の経営を八雲でやっているんだが、その経営が小  
さいということは別に北海道農業の建設的理想の妨げには

ならぬはずだ！おれらも町村氏と同じ気持の農民たり得る  
のだ。」

○「どうも頭の中が考えていっぱいで、とても眠られそ  
うもないな……。建設だ、建設だ。町村さんのあの言葉は、  
全く気に入ったよ。偏頗固陋な自給動労一本槍の指導方針  
は確かに間違っている。常に積極的な“建設”こそ北海道  
農民の精神なんだ。」

○「こうなると、いよいよ農民はいやでも優秀な建設技  
師でなければならなくなるなあ。やっぱり教養だぞ！我々  
は勉強しなければいけない。八雲の農民に教養を与えるた  
めの仕事は、根本的なことだよ。すべてのものを総合し発  
展させ、動かして行ける頭脳からして建設せねばならぬこ  
とになるんだ。“農民よ理想あれ”だ。だが、その理想その  
ものも教養の高低によって決定するんだ。牛乳代金が月に  
300円入ったとたんに、もう恥ずべき生活を始めたや、一層  
利己的なキツネのごとき人間になり了せたりするのも、つ  
まりその人間の教養のせいだと思ふな。町村氏は、その点  
でも北海道農民の目標だ。」

○「町村さんは若く見えるナ。60歳の老人とは考えられ  
ん。どう見てもまだ40台だぜ」「おれは町村さんがどうし  
てあんなに若く見えるかについて考えてみた。そして結論  
を得たんだ。彼には“夢”があるからだ。町村氏は自分  
の50haの経営にのみ凝り固まっていなくて、この一角から  
北海道全体を見て、そして一生懸命に、さっきのように石  
灰をすすめたり、土管排水法を教えたり、カルチベーター  
を工夫したりしていられる。つまり町村さんの理想は北海  
道全体につながり広がっている。町村さんが、いつまでも  
青年のように若々しいのは、その“夢”のせいだと思ふが、  
どうだ。もちろんそのほかに、あのしっかりした奥さんの  
存在も見逃すことは出来ぬが……。とにかく小さく自分のか  
らの中に納まってしまう人間は、早く年をとってしまうよ  
うだナ。」

○「こういう人が北海道に一人居てくれるということは、  
全く幸せなことだ。本人も、また大衆も恐らくそれほどに  
感じていないだろうけれども、これが北海道農民文化にど  
んなに多くの影響を与えているかわからないからナ」

○「そうだ我々の八雲でも同様なことが言える。僕たち  
は、その気づかない恩恵を八雲の誰かから受けて来たんだ。  
僕たちは、その点全く幸福だ。」

○「おれらはめいめい自分の仕事を完成させなければなら  
ぬが、同時に協力して八雲の農民の経済なり、文化なりの  
向上のために力を尽くすことが出来たら町村氏のように幸

福なんだぜ」

○「全くだな！こういう気持ちで積極的に仕事をして行けるという喜びが町村氏訪問の第一の収穫だったかも知れない」

○「全く来てよかった！」

**畜舎は牛乳と堆肥の生産工場である。**

**全農場は建物の延長とも思われた。**

50数haの農場の南辺と西辺とを村道が直角に走っている。その四角い農場の南面の一角約3haほどの中に町村氏の家と、家を囲む一群の建物がある。建物の主なるものは、搾乳牛25頭を収容するダブル式の大牛舎(この大牛舎には40頭ぐらい入る子牛舎が鍵の手に接続している)、休み牛や種雄牛候補や耕馬や豚を入れる別棟の大畜舎、製酪室、鶏舎、農具庫等であり、風車がひっきりなしに回転して、住宅や畜舎一つまり、全建物に給水している。これらの建物は、町村氏の家を司令部として整然と配列され、関連連して各々その部署を守っている。

大牛舎は、さながら牛乳製造工場である。大牛舎の北部を区切った一角は原料受入れ場で、すべての牛乳原料(飼料)はここから入る。そこには巨大な2基のサイロが並び、それに続いて3.6mぐらいひさしを下ろしたコンクリート床の吹抜きは青草置場で、ここへは馬車が横づけになって、牧草地から新鮮な青刈牧草がどンドン運ばれる。階上は濃厚飼料置場、そのすぐ下は配合調理室。サイレージでも、青草でも、濃厚飼料でも、すべての飼料は、時を定めて、この一角から三輪車で舎内に運ばれ、一人でもたたく間に全牛列に正確に給与される。給水の要はない。それは、1頭1頭に自動給水器が配置されていて、牛共は水を欲すれば、鼻先をそれにつけると、ジューと音をたてて清水が噴き上がり、離せばまた自動的に止まるの

表1 作付内容

作目	面積	備考	
牧草	乾草用牧草	14ha	チモシー、クローバ混播。
	青刈用牧草	8	1. 2番草とも乾草。主にクローバ。
	アルファルファ	2	
	エンバク(クローバ混)	6	エンバク刈ったあとクローバを1回刈る。
デントコーン	13ha	大部分ウイスコンシン12号。	
トウモロコシ	1	一部ミネソタ13号及びエロレント。	
飼料用ビート	3	青刈、種実兼用。	
その他	3	ピアビー種。	
		アマ50a、パレイシヨ60a、自家用野菜類1ha、牧草試作地1ha。	
計	50ha		

である。

驚くべきは巨大な煉瓦づくりの堆肥場と数個のコンクリート大尿だめである。尿だめはもちろんコンクリートでふたをしてあり、スイッチをひねれば、電気モーターポンプで馬車に汲み上げられる装置がある。

電気といえば、ここで用いるカッタにせよ、脱穀機にせよ、あらゆる作業機の動力は電力である。

この壮大な牛舎の中の100頭の大家畜群に与えられるべく大な飼料。そしてそれが排泄するおびただしい糞尿。その糞尿は少しのロスもなく耕地に戻り、また更に新鮮な飼料を増産する役目を務める。かくしてますますこの牛群の乳房は大きくなりまさり、バターの生産量も増して行くのである。

僕たちは、町村農場の建物の構造について、これ以上詳細な解説を試みるつもりはない。それは、八雲の7,8haの経営にはそのまま取入れることが出来ぬからでもあるし、恐らく、読者は「資力さえあれば、好きなような設備も出来るさ……」と、言いたいだろうからでもある。しかしながら今、僕たちがこの町村氏の農場の家、畜舎、その他の諸設備を、こんなに熱心に諸君にそれをふい聴せず居られないのは、なんのせいであろう。それは、あくまで積極的な町村氏の農業建設の精神が大小の差こそあれ、北海道農民に相通ずるものがあるからである。

生産にぜひ必要なものは何年かかっても万難を排して設備しなければ、50haの酪農業は回転し、かつ発展し得ない。それは、7,8haの我々の経営でも同様なのである。彼が敢然としてそれをやったのは、必ずしも“資産があった”ためばかりとは言えぬと思う。

**飼料, 飼料, 飼料**

**それが作物の全部である**

町村農場を飛行機からでも見下ろしたら南西部の宅地区を除いた50haの全耕地が余すところなく緑一色におおわれていることだろう。

その緑地帯の中でも黒色を帯びた一画はデントコーンであり、青味がかったのが2番草の繁茂しているところ。少々黄色を帯びているのが、2番を刈って3番が伸びかけているクローバ畑である。

諸君はすぐ聞くだろう。エンバクの刈りあとやパレイシヨ畑は緑色ではあるまい。ところがリーパーを用いたエンバク刈りあととは、なお更一層鮮やかなクローバの緑地帯なのである。パレイシヨは、自家用作物として、宅地地帯に作られていて目ざわりにはならない。

表1をみると、町村氏の農地の95%までが飼料作物であり、販売作物としては、義務的に作られるもののみで、ほかは若干の自家用作物である。なお、これらの作物は、だいたい次の輪作によって作られている。

1	2	3	4	5	6	7
クローバ	チモシー クローバ	チモシー (クローバ)	チモシー	コーン	コーン	エンバク (クローバ混)

### 作物の王座・牧草

前表で見られるとおり、このばく大な飼料作物の大半を占めるのが牧草地で、アルファルファも含めて24ha、全飼料作物の50%に達していることは注意すべきで、牧草地といっても我々の観念にある八雲の牧草地を連想してはならない。その広い牧草地のりっぱさは全く“行って見なければわからない”と思う。諸君がこの広い牧草地のどこに立ったとしても、八雲における沖積土地帯の最上の牧草よりも数等優れていることに驚嘆するだろう。

町村氏は、このりっぱな牧草地に家畜を放牧したり、つないだりすることは一切やらない。全部刈って乾草あるいは青草で牛舎に運んで給与して

いる。

青草は、1番、2番を通じて、ふんだんに刈っても刈り切れないくらいだし、乾草は14haの総収量実に150t。2つの大牛舎の2階は、この芳香の高いクローバ混りの乾草で充満し、なお入り切らずに畑に積んである。いくら食べさせても、食べさせ切れずに残る乾草が、このころは毎年20tぐらいあるようになったが、それをぜひ町村さんの牧草を欲しいと、競馬飼育者から頼まれて売るのが、t当り67円ぐらいで非常に有り難がって取りに来ると言う。

「石灰分が十分に含まれているということが、自然に、彼らにもわかって来たのですね……」と、町村氏は謙遜しながら語った。

思うに、町村氏の家畜飼料の基礎は、この良質豊富な牧草であるらしい。ちょうどチモシーとクローバの2番乾草を馬車で運んで、キャリアで盛んに2階へ上げていたが、その伸び、色、芳香、なんとも言えないりっぱなものである。また、僕たちはチモシーの2番やクローバの3番や、今年エンバクといっしょに播種したクローバの実にすばらしく繁茂している畑に、思わず足を踏み入れては、感嘆のあまり、動けなくなることを何回繰り返したか知れない。八雲の我々の農場と比べて、あまりにも異なった環境である。ここでこの草を飽食して飼われる家畜達がりっぱなのは、当然である。 —(以下次号)—

## 飼料作物に対する堆厩肥の連用効果

青森県畜産試験場

草地飼料部長

野村忠弘

### はじめに

農林水産省はこれまでの耕土培養法(昭和27年制定)に代わって、新たに地力増強法を制定し、昭和59年9月から施行されることとなった。これを受けて、昭和60年度から第2次土づくり運動が

展開される。たいへん喜ばしいことであるが、官主導の土づくり運動だけで土は良くなるだろうか。確かに今までの政策や社会情勢が地力を低下させる方向に向っていたことは否めない。しかしながら、責任を他におしつけていても土は良くならない。農民は自分の生活のために土地を道具として